

## 語り部の経営者たち

た

大学卒業後は海外で働きたいと考えるようになつた。だから就職活動では商社が苦手だったので採用にいたしません。そんな時に大久保氏。しかし、1960年代初め頃に海外進出しでいる企業は商社ぐらいだと

たといふ。大学卒業後は海外で働きたいと考えるようになつた。だから就職活動では商社が苦手だったので採用にいたしません。そんな時に大久保氏。しかし、1960年代初め頃に海外進出し

## 大久保 真一 社長 80歳

③

全日本学生写真連盟委員長を務めていた経験などを

日本上陸前のセブン—イレブンでも働く

「アメリカの共同仕入れ機構やドイツのボランタリー」

「だから就職活動では商社ばかり受けましたが、英語が苦手だったので採用にいたしません。そんな時に大

学の就職部で見たのが読売広告社の募集。これからは商業もマーケティングの時代だからおもしろうそだと感じ、受けることにしました

（アサヒグループHD）  
（マッテンワールド）  
（ダイオーズ）

（つづく）

## 語り部の経営者たち

ジャーナリスト 中川明紀



貨物船に乗つて旅立つた（右端が大久保氏）



# 「海外の夢」を捨てきれず渡米現地で流通の仕組みを学ぶ

評価されて、大久保氏は読売広告社に入社。2年間の営業部勤務を経て、かねて希望していた

マーケティングの部署に異動となった。ちょうどその頃、通商産業省（現・経済産業省）が小売業にボランタリーチェーンの仕組みを啓蒙していく定期的に海外の経営者を招いてセミナーを行っていた。ボランタリーチェーンを持つ独立小売店が組織化して、チエンオペレーションを展開する事業形態のこと。大久保氏は毎回のようにセミナーに参加して最前列に座り、海外の経営者の話を熱心に聞いていた。

「実は渡米する直前に長男が生まれたんです。でも、海外への道筋が定まるところ、大久保氏はテレビとラジオの英会話番組に英会話を学びたいと自分を売り込みました。彼らが帰国した後日本一の米屋にすることを受け入れて苦手な英語を死に勉強。通産省の担当者いないので妻子を連れていこうわけにはいきません。そこで両親に頭を下げ帰国後日本へ戻りました。父は引き受けてくれ、しかもアメリカへ向けて、妻子の面倒を約束して、行きの船賃も用意してくれました」

メリカへ貨物船の船底で旅立つた。

「まずカリフォルニアの共同仕入れ機構CGCに向かい、スーパーで働きながらもった經營学の権威である南カリフォルニア大学のマギニス教授を訪ねたりして、現地の流通の仕組みなどを学びました。教授からメイシーズやKマートなどの流通企業や話題の店舗を紹介してもらつて勉強しました。スーパーで6ヶ月働いた後はテキサス州のダラスに行き、まだ日本に上陸する前のセブン—イレブンでも勉強しました」

合計9ヶ月間のアメリカ研修を終えると、今度はヨーロッパに渡つてイギリスや世界最大のボランタリーチェーン西ドイツのEDEKAで勉強を重ねた大久保氏。その間はホテルは一切利用せず、ずっとホームステイをすることで、欧米の一般家庭の文化を見ることもできたと話す。そして、いずれは「アメリカで事業をする」という夢を抱くようになった。

しかし、2年間の研修から帰国して行つたのは、父の跡を継ぐことだ。実は渡米する直前に長男が生まれたんです。でも、海外での生活が保障されないので妻子を連れていこうわけにはいきません。そこで両親に頭を下げ帰国後日本へ戻りました。父は引き受けてくれ、しかもアメリカへ向けて、妻子の面倒を約束して、行きの船賃も用意してくれました」